

# 刊行に序して

本論集は、平成15年に承認された岡山大学文学部プロジェクト研究計画の成果報告である。

2007年は、ヨーロッパ連合の理念にその基盤を与えたローマ条約から丁度、50周年に当たる。ルーマニアとブルガリアの連合への加盟が認められ、ヨーロッパ連合は27の加盟国、その人口、4億5千万人の巨大な政治・経済的超国家組織に成長した。フランスとドイツは、1945年の第2次世界大戦に至るまで何世紀にもわたり、幾度もの戦争を通じて民族的、国家的敵対関係を継続してきた。しかし今後、フランスとドイツが再び戦闘を交えると誰が想像し得るであろうか。ヨーロッパ連合の成立は、世界史上の奇跡と言っても過言ではない。もちろん、連合内部に様々な問題のあることは事実である。そうではあるが近代国家の壁を越え、政治、軍事、経済のみならず文化をも含めた共同体の創造であることはまちがいが無い。われわれはこうしたヨーロッパの再生、ルネサンスをその光と影の両側面を視野に入れ研究をしようと意図した。

1. ヨーロッパ連合の成立は、ヨーロッパ的なものの再生と考えられるが、それに対する考察は、これまで主に政治的、経済的関心からなされてきた。文学部の研究として、このヨーロッパ的なものを、思想、歴史、文学の観点から考察する。

メンバーの永瀬はフランス文学、山口は哲学とフランス思想史、久保田はドイツ文学、吉田はロシア史を専攻している。

2. 中世において、ヨーロッパはキリスト教的理念のもとで、それに対抗する政治的原理をも包括しながらも、その理念を一度成立させた。さらには、17, 18世紀においてヨーロッパは「文芸の共和国」という形態のもとで成立したとする見解もある。このようなヨーロッパの統一は近代国家の政治的原理とそのナショナリズムにより、一旦解体、分化する。しかしながら第2次世界大戦を経て、ヨーロッパ共同体のもとで、ヨーロッパ的なものが政治経済的次元で再生し、現代のヨーロッパ連合にその実が熟したと言って過言ではない。ヨーロッパに対する政治・経済的研究はヨーロッパの現在、未来的側面を重視する。それに対してわれわれはこのヨーロッパ的なものの再生の淵源をその歴史に求め、思想や文化の中にその具体的相貌を探る。

3. 今日のヨーロッパ的なものは、単純に西洋対東洋という対立の極に位置づけられない。この両者以外にイスラム文化圏が存在するだけでなく、西洋文明において

ヨーロッパ的なものは、その対立項としてアメリカ的なものなどを生むに至っている。そうした差異を考慮に入れ、ヨーロッパ的なものを考察する必要がある。しかし本研究のメンバーの構成から、こうして重要で巨視的な視点を具体的には含み得なかったが、ヨーロッパと非ヨーロッパの狭間に位置するロシアを考察の対象とすることで、この責務の一部を埋めようとした。

4. ヨーロッパ的なものの再生は、決して肯定的面だけ考察されるべきではなく、その否定的側面をも見据える必要がある。ヨーロッパ的なもののナショナリズム的、植民地主義的、オリエンタリズム的性格は無視することのできないいわば影の部分であり、そのことを視野に置きつつ考察をすすめなくてはならない。ヨーロッパ的なものの肯定的面と否定的面は、本論集の各論文に問題意識として見られることであらう。

以上のような問題意識が本論集にどれほど反映しているかどうかは、読者の批判を請うところであるが、研究時間が十分に確保できない現状にあってこうした共同研究を通じてメンバー一同が学び考える機会を得たことをさいわいとしたい。また、こうして機会を提供していただいた岡山大学文学部プロジェクト研究計画に心より感謝の念を示したい。

著者一同